

旅の曲者

田中 真知

「ありがとう」は要らない

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に「アフリカ旅物語」(北東部編・中南部編、凱風社)、「ある夜、ピラミッドで」(旅行人)、訳書にグラハム・ハンコック「神の刻印」(凱風社)、「惑星の暗号」(翔泳社)など。



旅

の面白さは曲者との出会いにある、とぼくは思う。曲者といっても、必ずしも人を意味するわけではない。異文化や他者に触れる時に違和感を訴えてくるさまざまな事柄——それをここでは曲者と呼びたい。

気を付けなくてはいけないのは、何かを曲者と感じる時、それは往々にして、自分たちの常識や感性の許容範囲を超えているというだけのことが多い点だ。問題は相手ではなく、「常識」や「当たり前」に囚われてしまう自分の感性のこわばりの方にある。

このエッセイでは、そんな硬直した感性に強烈な揺さぶりをかけてくる曲者との出会いを書いていきたい。

さ

て、第一回目で取り上げるのは「言葉」である。外国を旅するうえで、言葉はできたほうが便利だ。けれども、アフリカや中東あたりになると、英語やフランス語といったメジャーな言語が通じない国も多い。言葉なんぞ、できなくてもなんとかなるのだけれど、少しでも現地語を話せると、相手の態度が格段に好意的になることが多い。

そんなわけで中央アフリカのザイル



豊かな森に囲まれたザイル河流域の村

ル(現コンゴ民主共和国)の田舎町に滞在していた時にも、ぶらぶらしていたザイル人の若者をつかまえて現地の言葉であるリンガラ語を教えてください、と頼んだ。

ザイルは旧宗主国がベルギーだったことからフランス語が通じる。けれども、ザイル川を下る計画を立てていたぼくは、川沿いの村でリンガラ語が片言でも話せれば便利だろうと考えた。

そのザイル人の若者はぼくをバールに誘った。ビールが授業料というわけである。ぼくは彼の前でノートを広げて、そこに知りたい言い回しをフランス語で書いた。「これは何ですか」と

か「ここで食べ物を買えますか」とか「次の村まであとどのくらいかかりですか」といった基本的な質問である。こうしたフレーズをリンガラ語では何というのかメモしておこうと考えたのだ。

ところが、若者は、これらのフレーズを見ると、眉間にしわを寄せて考え込んでしまった。「これは何ですか」といった単純なフレーズでさえ、口ごもっている。これにはぼくも当惑した。若者はふだんはリンガラ語を話している。しかしフランス語も流暢に話すことができる。けれども、フランス語をリンガラ語に翻訳しろという、できないのだ。これはいったいどういうことか。

そのうち、バールにいた他のザイル人たちも寄ってきて、ぼくのノートを覗き込んで、あーだこーだと議論し始めた。議論するほどの難しい内容ではないのに、と思ったのだが、そのときハッと気付いたことがあった。ひとつとして、彼らの中で、リンガラ語とフランス語はまったく別のものとして理解されているのではないか。つまり両者は翻訳できるものとして捉えられてはいないのではないか。

イラスト：bozen



高床式の家のそばで。雨季になると河は増水し、地面が水の下に沈むこともある

たしかに見ていると、彼らがリンガラ語を話す時とフランス語を話す時とは、声の調子や態度までもが別人のように変わる。言葉には意味内容だけではなく、思考の形式から、態度、物腰、話題までを包み込む世界がある。リンガラ語を話す時、彼らはその世界にすつかり浸りきる。一方、フランス語を話す時は、リンガラ語の世界を完全に断ち切って、フランス語の中で考えたり、話したりしているのだ。ぼくたちのように、頭の中で日本語から外国語への翻訳作業を行いながら話すなんてことはない。だから、フランス語をリンガラ語に直せなどといわれると当惑してしまうのだ。受験やテストのために、外国語を初めから翻訳可能



丸木舟で夕暮れの河を行く村人たち

ものとして教えられてきた身には新鮮な驚きだった。

そのうち、リンガラ語で「ありがとう」は何ていうのか、とぼくが訊いた。すると驚いたことに、皆、考え込んでしまった。ひとりが「メルシー」だろうといった。「そりゃ、フランス語じゃないか」とぼくが言うと、「そうか」といつて、また皆考え込んだ。しばらくして、バーカウンターの中の女が、「やっぱりメルシーでいいのよ」と言った。

どうやら、リンガラ語には「ありがとう」にあたる言葉がないのだ。ちなみに「すみません」にあたるリンガラ語は「パレド」で、これはいうまでも

なくフランス語の「パルドン」から来ている。

「ありがとう」や「すみません」にあたる言葉がないのは、彼らに感謝や謙譲の気持ちがないせいなのか。しかし、その後、一カ月に渡ってザイル川流域の村を訪ねたが、そういうことではないようだった。

彼らは「メルシー」というフランス語をリンガラ語に取り入れて使っている。しかし、ぼくが感じたのは、その使われ方のぎこちなさだった。挨拶代わりに、いきなり「メルシー」と呼びかけられたり、別れ際に「メルシー」と言われたり、意味もなく「メルシー」を連発されたりと、使われるシチュエーションがどうも変なのだ。そのくせ、こちらが彼らに何かを与えたり、してあげたりした時——つまり「メルシー」が使われるのにふさわしい時に——メルシーと言われることはあまりなかった。彼ら自身も、この言葉を使いあぐねているのかもしれない。

ひよつとしたら、彼らの人間関係において、感謝をいちいち言葉に表す必要がないのではないか。小さな共同体で、皆知り合いばかりなので、あえ

て互いに「ありがとう」などと言わなくても、事が済むのではないか。感謝を言葉にしないと人間関係がぎくしゃくしてしまう社会では「ありがとう」と口で言わなくてはならないのだろうが、少なくともここはそういう社会ではない。ところが、そこに感謝を要求する異民族がやってきたことによつて、「メルシー」という外来語が新たに付け加えられた、ということではないだろうか。

カラハリ砂漠に住むブッシュマンもまた、相手の好意に対して、いちいち礼を言ったりしない、トイギリスの作家ロレンス・ヴァン・デル・ポストは書いている。ヴァン・デル・ポストはこの習慣に触れた時、ブッシュマンの老人はこう言ったという。

「あなただつて、まさか、ただ行儀よくふるまっただけで感謝してもらうつもりはないでしょう。それはただ礼儀正しいことであつて、きちんと育てられた人々の間では当然の行いに過ぎません……。ブッシュマンたちは、ありがとうということ、あなたはいつになく行儀がよかったですねとあてこすり、相手を軽蔑するような愚は冒さないでしょう」と。